明治三陸大海嘯における宗教者の活動について

佐藤　千尋

キーワード　　明治三陸大海嘯　津波　震災　災害　宗教

はじめに

明治三陸大海嘯は明治29年６月15日に発生し、青森、岩手、宮城の三県に甚大な被害を与えた海嘯（津波）である[1]。犠牲者の数は三県合わせて２万５千人以上ともいわれ、近代を迎えた日本が初めて経験した津波災害でもあった。

本稿は当時未曾有の死傷者を出したこの大災害時に宗教界、宗教者が行った活動について概観したものである。

1　海嘯の発生と宗教界の動き

海嘯が発生したのは明治29年（1896年）６月15日のことであった。その日天気は朝から薄曇、気温は23度前後、海は一日中穏やかであったという。この日は旧暦の５月５日の端午の節句にあたり、男児のある家には親戚縁者が集まって節句祝いが行われ、また時節柄、田植えの労をねぎらう宴、日清戦争の帰還兵を迎えた祝宴など、この日の夜はいたるところで宴が催されていた。この日岩手県・宮古測候所では震度三程度、前兆というにはあまりにも弱い体感地震が夕方から夜にかけて数回観測されている。そして夜８時頃、遠く仙台にまで響いたとも言われる突然の轟音と、海上、あるいは山に閃光を認めた数分後、青森、岩手、宮城の沿岸地域は未曾有の大津波に襲われ、その後には破壊しつくされた村落と多数の死体が残された。

『大海嘯被害録』はその模様をこう記している。

市街となく村落となく総て狂瀾氾濫の没する所となり沿海一帯七十余里俄

1　当時は「津波」という言葉は使用されておらず、「海嘯」に「つなみ」あるいは「かいしょう」とルビを振っているため本稿でも表題については「海嘯」を用いている。

かに一瞬間にして人畜家屋船舶其擧て殆んど一掃し去れり輙ち昨日まで家屋櫛比の市街も今や変じて平沙荒涼となり死屍は累々堆を為し家屋は流壊し満目一として凄惨ならざるなし其惨状実に戦栗に堪ざらしむ而して其狂瀾の高さは八十尺以上に騰れりと云ふ[2]

（図１）海嘯直後の様子『大海嘯被害録』より

未曾有の大津波の第一報は翌日16日の午後３時に内務省に伝えられ、各省庁、関係機関はただちに現地に人員を派遣する。仙台市内ではこの日号外が出され、報を受けて仙台の第二師団と日本赤十字宮城支部も医療班を現地に派遣した。（表）は津波発生直後から一カ月間にわたる宗教界の動きを、当時の新聞報道等から抜粋してまとめたものである[3]。

仏教界の活動が目立つのは、もともと数の多い仏教の各宗派、寺院ごとの活動が報じられたためであるとも思われるが、実際この大災害において仏教各宗派では被災地に特使を派遣し、精力的に現地で救済活動を行っている。名和[4]によれば、明治24年に濃尾地震が発生した際、仏教界では「宗教家である僧侶

2　復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊大海嘯被害録　遠野文化研究センター　2012　p17

3　奥羽日日新聞明治29年６月16日－７月20日、東北新聞明治29年６月16日－７月20日および『岩手県陸中国 南閉伊郡海嘯記事』　明治30年　より作成。
新聞報道では実際に活動が行われた日との時差が発生しているため、あくまでも各宗教団体の動きとして提示するものである。

4　名和月之介「明治中期における仏教慈善事業の形成について」『四天王寺国際仏教大学紀要』2005　p35

は、奮然この災害救護に従事し、亡者に対しては追悼供養に怠りなく、生者には畢生の力を奮ってその困窮を救助すべきである」、「演説会を開いて救恤の急を告げ義捐金を募集したり、大法会、大法話会を開催し、震災者の不幸を哀悼し、また広く震災の惨状について全国人民に感触を持ってもらうのも方便である」といった具体的な慈善的方策が提言されていたという。

結論から言ってしまえば、三陸大海嘯の発生を受けて仏教関係者が行った活動はまさにこの提言そのものであり、明治24年の濃尾地震で指摘された被災地救済活動の内容は、その５年後に発生した三陸大海嘯においてそのまま援用されたともいえるであろう。

２　被災地における宗教者の活動

この提言をふまえつつ、三陸大海嘯を受けた被災地で実際に宗教者が行った具体的な活動を、前述の提言のうちの「広く震災の惨状について全国人民に感触を持ってもらうのも方便」という方策に準ずる如く、現地で活動した宗教者たちが新聞社に投稿した手記[5]を手がかりとして見てゆきたい。

２－１　生存者に向けた活動

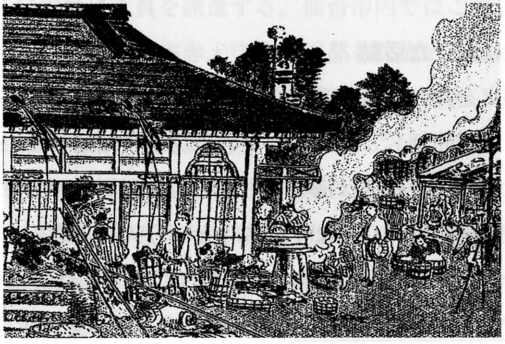
当時仙台に拠点を持つ、超宗派的な仏教研究会であった仏教顕揚会は、会員である僧侶らを「慰問師」という名称で各被災地に派遣する。そのメンバーの一人、佐々木教潤という僧侶は海嘯発生から約二週間後の６月29日、被災地であった宮城県の気仙沼に入り、まず観音寺という天台宗寺院を訪問した。この寺院は日本赤十字社の仮病院として使用されており、目的は傷病者の慰安で

5　宗教者と手記の掲載日は以下の通り。
- 佐々木教潤（仏教顕揚会）「宗教的慰問紀行」東北新聞
  掲載日：明治29年７月５日、７月11日、７月18日
- 佐藤静嘉（真宗大谷派）「被害地見聞録」奥羽日日新聞
  掲載日：明治29年７月14日、７月17日
- 黒澤十太（仏教顕揚会）「被害地見聞雑記」東北新聞　掲載日：明治29年７月５日
- 白鳥励芳（曹洞宗宗務支局）「被害地巡察日記」奥羽日日新聞
  掲載日：明治29年６月28日

あった。慰安の内容は主に法話で、佐々木らはおもに「無常覚悟」の説法を各地で行っていた。

この、寺院が仮病院として使用されていたことについてであるが、2011年の東日本大震災においても宗教施設が各地域の災害対策拠点となったことが注目されたが、明治三陸大海嘯でも高台に建てられることが多かったためか難を逃れた神社仏閣は多く、それらは災害支援拠点（図２－１）、仮病院（図２－２）、遺体安置所（図２－３）、その他小学校の仮校舎として活用された。

特筆すべきは、被災地での自らの活動を佐々木は被災者の「精神的救護の任」と称し、訪問先の責任者より得た情報に応じて、法話毎に被災者の不安を払拭する説諭を行っていたことである。この観音寺では病院職員より、被災者が本来無償である医療援助を有償と思うことで傷も癒えぬうちに退院してしまう事、また、入院患者の着用する白い寝衣を死人の服と嫌い医療者を困らせていることを耳にし、各地での法話毎にその誤解を解くことに勤めている。翌日訪れた気仙沼でもやはり現地に派遣された憲兵隊長より、「妄想の為に恐怖す」、つまり未だ遺体の散乱する被災地で幽霊におびえる[6]罹災民を安慰するのは宗教者



（図２－１）災害支援拠点として用いられる寺院
『大海嘯被害録』より

6　佐々木教潤　「宗教的慰問紀行」に、「罹災民は大施餓鬼修行後ならでは其業に就かず」「幽霊出とて夜に入れば外出するものなく又漁業をなすべきものなし」とある。
　また、奥羽日日新聞　明治29年６月28日に被災地の多くで「施餓鬼を行うまでは漁船を出せない」という被災地の声が掲載されている。

（図２－２）仮病院として使用される寺院
『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記事』より

（図２－３）遺体置き場となった寺院（門前）
『大海嘯被害録』より

の役目であるという言葉を受け、その後の各地で積極的にその妄想を払拭すべく内容の法話を行っている。

このような被災地での法話は各宗派においても行われており、曹洞宗から孤児救済の目的をもって派遣された僧侶・白鳥励芳も、本来の目的だけではなく、仮病院を訪れ、被災者向けの法話も行っていた。このような僧侶の訪問と法話に患者たちは「感涙に咽びて謝意を表し」[7]ている。

7　奥羽日日新聞　明治29年６月28日

法話は仮病院だけではなく、各被災地の寺院や個人宅などでも適時行われた。浄土真宗大谷派から派遣された僧侶・佐藤静嘉は、被災地を移動中の目的地外であっても、たまたま目に入り訪問した仮小屋（家を失った被災者が廃材等を利用して建てた小屋）や、移動中の休憩時に居合わせた被災者に対しても法話を行っている。その内容は主に被災者を慰撫するようなものであり、例えば[8]移動中の休憩時に出会った、嫁と孫を失ったという老婆に対して佐藤は「罹災者は汝のみ然るにあらず三縣下四万に近し徒に悲泣せんよりは宿世の業因の然らしむる処なりと悟り益々後事を励むべし」と「業因」という言葉を用いて災害が不可抗力であると老婆を諭し励ましている。この老婆は佐藤の言葉に対し、「私は災害を悲しんでいるのではなく、私たちのために数百里もある距離をわざわざ来てくださった貴僧の行為のかたじけなさに涙が出るのです」と答えた。

２－２　死者への対応

未曾有の大災害によって一時に大量に発生した死者への対応も、被災地における宗教者の役割として最も求められていたことであった。漂着、あるいは回収された海嘯犠牲者の遺体は各村一カ所に集められ、身内の引き取りを待つことになっていた（図３－１、３－２）。

遺犠牲者の遺体は連日浜に打ち上げられ、ある村では地引網で五十体以上の

（図３－１）『大海嘯被害録』より

（図３－２）『大海嘯被害録』より

8　奥羽日日新聞　明治29年７月６日

遺体を引揚げたという[9]（図４）

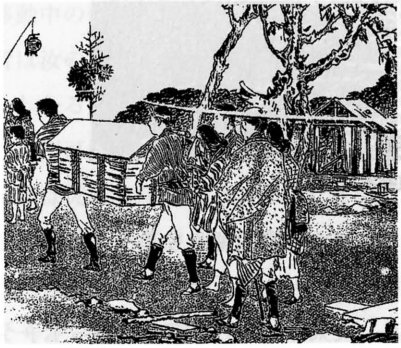
（図４）『大海嘯被害録』より

犠牲者の遺体は損傷の激しいものが多く、また時節柄腐敗も進み、身元確認は困難を極めた。しかし家族に行方不明者を持つ人々は新たな遺体が発見されると、自分の探す家族ではないかと「腐乱、臭気激しい」にもかかわらず争うように駆け寄ったという[10]。家屋や瓦礫の下敷きになった遺体の収容作業は、主に生存した地域住民らによって行われていたが、この作業もやはり被災者でもある彼等の精神を疲弊させるものであった。場所によっては遺体が放置されたままになっており（図５）、そのような場所は人もおそれて近寄らぬ場所と

（図５）被災地に放置された遺体『大海嘯被害録』より

9　『復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊　大海嘯被害録』p 107
10　『復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊　大海嘯被害録』p 43

なった[11]。「昼夜絶え間なく」棺桶は製造されたが、出来上がったものは遺族が争うようにして受け取るといった様であり[12]時間の経過と共に遺体の腐敗が進んでくると漂着した遺体は漂材と石油を用いてまとめて火葬（図６）され、そのまま埋葬されるようになった[13]。また埋葬場所の不足から一家に一穴と、家族内の死者はまとめて埋葬されることもあった[14]。



（図６－１）葬儀『大海嘯被害録』より

（図６－２）遺体の火葬『大海嘯被害録』より

埋葬あるいは火葬という遺体の物理的な処理が追いつかない状態のなか、当然葬儀等の儀礼的な処理を行うことができない場合も少なくなく、佐々木の手記によれば、僧侶の姿を見ると遺族たちは、争うようにして供養と法名を依頼したという。このようなニーズを受けて真宗大谷派からは法名を与えるための団体、死者の葬儀をするための団体が[15]、曹洞宗においては「吊葬導師」という名目で、葬儀を行うための僧侶が次々と被災地に派遣された[16]。佐藤の手記によれば、ある村の合葬場で読経を行った際、墓に法名がないことに気づき、それらに法名を与えていったところ、傍で作業をしていたやはり自らも被災者である人夫たちは大変喜び、「いままで宗教家の来訪がなく供養が充分されないまま死体は埋められていた。わざわざ本願寺からご供養に来てもらってなん

11　『復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊　大海嘯被害録』p 197
12　『復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊　大海嘯被害録』p 193
13　東北新聞　明治29年６月21日
14　『復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊　大海嘯被害録』p 196
15　東北新聞　明治29年６月22日
16　『復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊　大海嘯被害録』p 21

とかたじけないことか」「この日十人もの遺体が揚がったのは死者がこの弔意の恩恵にあずかろうとしてなのかもしれない」と話した。また仏教顕揚会の慰安師の一人、黒澤は岩手の階上村で、やっと法名を得て娘と孫を仏にすることができたと慟哭する老婆を見たと手記に残している。彼らは乞われて個人宅での回向を行うこともあったが、感謝した遺族から出された布施や謝金は固辞している。

また宗教者たちは積極的に未だ遺体の残る海岸や村落を行脚し回向、供養を行っている。（図７－１，７－２，７－３）被災者たちが遺体の放置された海岸やそこに現れるという幽霊におびえ、あるいは村によっては僧侶の回向が終わるまでは漁労が行えないという訴えを受けてこのような行脚が行われること

（図７－１）『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記事』より

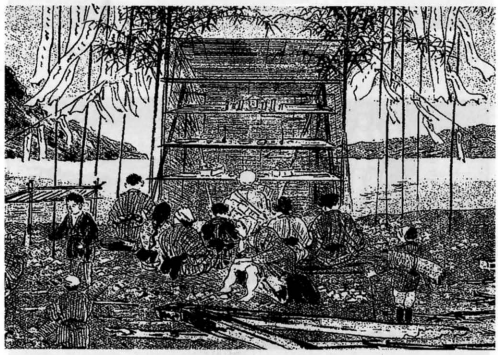
（図７－２）『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記事』より

（図７－３）『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記事』より

もあった[17]。

また彼らは地元の僧侶が行う回向にも積極的に参加しているが、これについて注目したいのは、自らの宗派と異なった地元宗教者と共にこれらの儀式を行うこともあったという点である。例えば真宗大谷派から派遣された僧侶の佐藤は、被災地の海岸に施餓鬼壇（図８）を見つけ、その導師であった地元の臨済宗寺院の住職に申し出、共に読経を行っている。

住職は謝意を表して少ない物資の中から佐藤に握り飯を振舞おうとしたが、佐藤は気持ちだけで充分、とこれを辞した。



（図８）このような施餓鬼法要は各地で行われた。
『大海嘯被害録』より

17　奥羽日日新聞　明治29年７月２日

仏教顕揚会の佐々木はある壊滅状態の村を訪れ、唯一残された寺院に赴き一人読経を始めると、その声に導かれるように生存者が集まり始め、悄然としてその読経を聞いていたという。やはり他の被災地で同様の経験をしている佐藤も「仏教の潜勢力しかく尚大なるに感じぬ」、「目下罹災民の渇望は僧侶の来救にあり」と手記に綴っている。

仏教顕揚会の慰安師として被災地を訪れ、後にジャーナリズムに転じた黒澤[18]は、僧侶の慰問が被災者にとって必要とされる理由について「僧侶は尊厳なるものとは古来一種の観念なればなり」とし、さらに慈善団体や各省庁から派遣される慰問者と宗教者を比較して、被災者は前者に対して威光の念を持ち、後者に対しては「感」、「情」、つまり意識的にコントロールし難い情動の念を持つ、と自らの経験を踏まえて述べ、この情動を受けとめることができる点で、宗教者の来訪が他より一層感謝されているのであろうと指摘する。つまり、宗教者が被災地において必要とされる理由を、ある程度の権威を持ちつつ、被災者の感情を受け止めることができるからであるとしている。

この「権威」という点において、三陸大海嘯が発生したこの明治中期を名和は、廃仏によって守勢に立たされた仏教が攻勢に転じ、自らの社会的有用性の発露に新局面を迎えた時期であり、慈善事業への関心を高め実践活動を活発化させるようになった時期でもあった、と指摘している[19]。ここに被災地における宗教者達のこれらの行為が、廃仏毀釈によって失った権威を回復させ、世に仏教の効用を知らしめるための方策であったのかという疑問が生じる。たしかに仏教顕揚会は後に、被災地での活動について「仏教各宗は何れも十分の力を尽くして有形無形の救済に従事したる結果仏教と力と徳とはあまねく世人の肺

18　黒澤は後に東京朝日新聞の記者に転じる。余談では在るが、黒澤は「一枝の筆三陸を弔ふ」と称して被災地を廻っており、宗教者というよりはむしろジャーナリズムの視線で被災地を訪れている。本文は以下のとおり

「洋服と法衣とを比較するに彼等は前者に対して威光の念起り後者に対して心服の情起る威光は意なり識なり心服は感なり情なり人生理は抂（ま）ぐべし感情は抂ぐる能わず是彼等の僧侶の慰問は他より一層感謝深き所以、仏教家布教上此段の機微を悟了するを要す」

19　名和月之介「明治中期における仏教慈善事業の形成について」
『四天王寺国際仏教大学紀要』2005　p 29

肝に銘ずるの至り」と、被災地での救済活動が人々に仏教を再認識させたと述懐する。[20]

しかしこの仏教顕揚会の慰問師達が細浦（現・南三陸町）という村で行った回向の法話会ではこのような出来事があった。彼等が法話を行っていると、参列していた村民「十三四の男女より七八十の老人」皆が滂沱の涙を流し会場は嗚咽に包まれる。この村はもともと153人の住人が暮らしていたが、海嘯により121人もの犠牲者を出している。つまり参加者は皆家族の大半を亡くした遺族であった。法話の後に読経が始まるが、経を読み始めた慰問師達の声は段々と低くなり、そして、ついには慰問師達もまた嗚咽し、泣きじゃくるに至り読経は完全に中断し、場はただ嗚咽の声に包まれた。[21]また、真宗大谷派の僧侶・佐藤は、ふと訪問した仮小屋で、波に洗われて箔の落ちた釈迦如来像と位牌、そして欠けた徳利にしおれた野菊を生けた仮の仏壇を目にする。そしてその前に悄然と座した中年女性の、最愛の夫と母、そして財産すべてを失ったという涙ながらの訴えを聞き、そして自らも号泣する。読経も法話も行うことなくただ涙し「慰愉するに語なく唯黙礼して」仮小屋を後にした佐藤を女性は合掌しつつ見送った[22]という。

先に述べたように、宗教者達はそれぞれ葬儀や供養、法話による慰安、孤児救済といった本来の目的に加え、率先的に被災地を巡り、被災者の求めに応じ、あるいは自発的な行動も行っている。それに加え、このような被災者に共感し、涙したという宗教者達のエピソードからは、彼等の被災地における活動が宗教を基盤とし、あるいはその団体名が示す如く仏教を顕揚するという目的が前提にあったとしても、時にそれを越えた宗教者としての内発的な慈愛的精神があったことがうかがえるのである。

20　奥羽日日新聞　明治29年７月24日
21　前掲　佐々木教潤（仏教顕揚会）「宗教的慰問紀行」明治29年７月11日
22　前掲　佐藤静嘉「被害地見聞録」明治29年７月17日

3　その他

以上、被災地の現場における宗教者達の活動について概観したが、その他、被災地外で行われた宗教界の被災地支援として、各地で行われた追悼行事と募金活動についても触れておきたい。仏教界では濃尾地震を受けて「演説会を開いて救恤の急を告げ義捐金を募集したり、大法会、大法話会を開催し、震災者の不幸を哀悼し、また広く震災の惨状について全国人民に感触を持ってもらうのも方便である」という提言がなされていたが[23]、被災地に派遣された後、戻った宗教者達はこの報告会ともいえる法話会を積極的に行っている。

さらに犠牲者に対する追悼行事は海嘯発生直後より各宗派、各地域で活発に催され、本来は死者に対する追悼行事でありながら、その目的を被災地支援の募金集めと標榜したものも少なくない。これらの法会は日々新聞、あるいは伝聞を通じて伝えられる被災地の惨状に胸を痛めながらもなすすべを持たなかった一般市民の心情を昇華させる機会となったらしく、どれも多くの参加者と義捐金を集めている。このような会は現在のようにマスメディアの発達していない当時、被災地の現状を伝える術として、そして一般からの善意を募る手段として非常に有効なものであり、大規模なものは海嘯発生から一カ月後の７月に東京の築地本願寺で行われた大法要で、この一回の会で集められた義捐金は1590円、支援物資は車68台分にもなったという[24]。また、この機に集められた金品はまた宗教者によって被災地に届けられることとなり、宗教者は被災地支援を行いつつ現状を視察して戻り、会を開催し、集められた金品を宗教者が被災地に届けるというように循環、継続する被災地支援の形となった。

おわりに

2011年の東日本大震災を受け、被災地では直後より各宗教団体、宗教者たちがそれぞれの立場で支援活動を展開した。日本が近代を迎え、宗教界において

23　名和月之介「明治中期における仏教慈善事業の形成について」『四天王寺国際仏教大学紀要』2005　p 35

24　奥羽日日新聞　明治29年７月15日

も大きな変動を経験した明治時代中期に発生したこの大災害において、宗教者は死者に対する回向、供養、葬儀といった、本来は行われるべきであるものの災害という非常事態によって妨げられた死に関連する宗教的な手続きを行うことを主として被災地での活動を展開したが、これらは結果的に遺族等、生者の心を慰撫するものともなっていた。

宗教者達は被災地において待たれる存在ではあったが、宗教者が全面的に受け入れられたという訳ではない。失うものの大きかった被災者の中には人生に絶望し、信仰に疑問を持つものも少なくなかった[25]。また世論においては、赤十字の活躍に乗じて、同じようなシンボルを持つキリスト教がこれを布教の方便とすることを警戒する声もあり[26]、宗教者が被災地で受け入れられたのは仏教という本来より根付いていた信仰がまずあり、死者儀礼が死に対する一つの区切りとなる習俗が被災地に根付いていたことも理由であると思われる。

明治維新、廃仏希釈など社会変動著しい時期に宗教者達がそれぞれの立場から、宗教、宗派という枠組の中ではあるものの内発的な感情によって被災地支援を行い、精神保健という概念の薄いこの時代に、宗教者がいわゆる「心のケア」を意識して被災者の精神面の援助を行っていたということも興味深い事実といえよう。

また寺院等の宗教施設が、病院、遺体安置所など公的なインフラとして用いられたことは、現代にも通じる災害時の宗教の役割としてあげられる。時には超宗派的でもあった寺院間のネットワークが宗教者の被災地活動を支えたことについても同様である。

25　被災地の現状を伝える記事に「仮葬式施餓鬼抔の相談も家族を喪し者の中にはヤケ説を唱ふるが多く纏め方に頗る苦しみし」とある（奥羽日日新聞　明治29年７月14日）。また、一家全員を失った男が熱心に信仰していた日蓮像を発見し、「今まで信じていたのに！」と石をつけて海に沈めたという話も残っている。（『復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊　大海嘯被害録』p172）

26　本文は以下のとおり。「狡猾な耶蘇教徒が之を以て自家の恩賞と称し宗教伝播の方便を為す者あらんと是なり、古昔より宗教社会には狡徒多し当局者深く注意し他人が狗肉を売るの羊頭として濫せ用らるるなかれ」（奥羽日日新聞　明治29年７月14日）

また、岩手県では神官、僧侶を名乗って流言浮説を流しながら祈祷や呪符を売りつけるものがあるので見つけ次第処分するようにといった通達が出されている。

（『岩手県陸中国 南閉伊郡海嘯記事』明治29年７月13日通達）

本稿では確認できた資料の都合上仏教界における活動の概観となったが、今後は他宗教の活動についての調査検討を、今後の課題としてあげておきたい。

＊本文中に使用した画像の出典は以下のとおり。

『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記事』日本赤十字社宮城支部 編　明治31年

『復刻版明治29年「風俗画報」臨時増刊　大海嘯被害録』遠野文化研究センター 2012

〈表〉海嘯発生一ヶ月の各宗教の動き

		一　　般	仏　　教	キリスト教	神　　道
6月	15日	津波発生（20時頃）			
	16日	15：00内務省に第一報 第二師団医療職員派遣 日赤仙台支部・医師、看護師派遣 日赤福島支部・医師、看護師派遣 近隣町村より医師派遣 仙台市内に号外発行			
	18日	天皇陛下の侍従被災地慰問に出立			宮城縣神職取締所長・後藤文哉、17日、本吉・桃生に調査
	19日	逓信省事務官、国債局員、農務省、大蔵書記官、気象台技手、逓信省技手、震災予防調査会、海嘯調査員、自由党、国民協会等各省庁、政界より視察員派遣。		フランス人宣教師の罹災が判明（釜石）	
	21日		曹洞宗：仙台宗務支局で２千人法要 浄土宗：森師被災地を廻り回向と法話 曹洞宗：静岡中学林で大追吊会執行	宣教師モール夫妻援助表明 石巻正教会より県に六円の義捐金	
	22日	板垣内務大臣被災地に向かう			
	24日		真言宗：満福寺（仙台）で施餓鬼法要 浄土真宗：大谷派、三百圓の義捐金と共に僧侶派遣。被害寺院調査と被災していない寺に尽力訓告。		
	26日		曹洞宗：調査員派遣 浄土宗：新寺・善導寺にて法要	仙台カトリック関係者現地視察	現地にて神社被害調査
	27日		被災地松岩村、大島村、唐桑村にて大施餓鬼施行。		
	28日		日蓮宗：百圓の義捐金と信徒現地派遣 浄土真宗：大谷派本願寺内事録事より千四百圓持参で被災地入り「親しく死亡者の冥福を吊ひ且つ罹災民を慰撫」 仙台満願寺(仏教顕揚会)：罹災民慰問師派遣。(佐々木教潤師、黒澤十太師他) 曹洞宗：仙台宗務支局４名の派遣員帰仙。本山に報告書提出 曹洞宗：東京から来た代表者が現地入り。仙台・大内氏の義捐金百圓を持って被災地へ出立。	押川方義（東北学院大）現地視察　信者被災地入り （21日気仙沼入り24日帰仙） 「同教徒は専ら救済の為に尽力を」と通達	
	30日		角田某寺院にて大施餓鬼法要 曹洞宗南本山・追吊導師、特派員、岩手県および曹洞宗取締慰問のため釜石到着	仙台より宣教師、本吉へ出張。被害人民に物品恵与。	

		一　　般	仏　　教	キリスト教	神　　道
7月	2日		浄土真宗：大谷派　負傷者に手拭、死亡者に法名、家屋流出者に六字名号の本尊を配布 崇徳会　葬儀挙行のため被災地巡行 曹洞宗：宮城宗務支局より慰問と金円を南閉伊郡罹災者に贈る。 真言宗：寺院、信徒へ募金通達		
	4日		曹洞宗：大本山より特使派遣。孤児救済の任に当たる予定 曹洞宗：本山特使本吉・桃生を巡行　牡鹿郡にて現地30寺と合同で大施餓鬼法要	仙台基督教徒有志者による慈善音楽会開催	
	5日		浄土宗：増上寺名代による大施餓鬼（東京）	宣教師モール夫妻・被災地にて援助物資配布	
	7日		大谷派：大供養祭 真言宗：募金開始 松島で一般市民と仏教関係者有志による灯篭流し挙行 大阪・帝国慈恵女学院，孤児（女児）受け入れ開始		
			天台宗中尊寺一山総代として円乗院住職佐々木玄長、慰問として釜石に来る。	盛岡天主教宣教師デフレンス氏、函館天主堂ベリコス氏、臨時救恤事務所を訪い、ベリヨス氏よりは金五十円を救助費に義捐。	
	10日		浄土宗：森亮、仙台市浄土宗山本徹応、同仏教顕揚会代表者・佐々木教理の諸氏等、慰問として来る。	首都圏の外国人宣教師被災地視察のため旅券申請 仙台各基督教育救済会慰問者・佐々木純一釜石に慰問	神社庁、富山水害と併せた地鎮祭挙行
	11日			東北学院大宣教師夫妻、孤児受け入れ	
	12日		岡山・牛窓港青蓮寺住職義捐金若干圓と共に来仙。		
	15日	軍艦和泉による遺体捜索開始	西本願寺大法主大谷光尊師より 宮城　500圓 岩手　1000圓 青森　200圓　の義捐金 築地本願寺で義捐金を募集したところ1590圓と物品68車が集まる。 さらに３名の慰問僧派遣決定 明教新誌記者　安藤嶺丸、安藤正純被災地派遣		
	16日		仙台・本願寺別院で吊葬祭	日本基督教会牧師・三浦徹、外国人とともに来釜、負傷患者に対し、懇篤なる慰問と贈品。	
	18日		東京・築地本願寺より慰問師三名被災地へ向かう		

The support activities of the religious people for the 1896 Meiji Sanriku *Tsunami*

Chihiro Sato

The *Meiji Sanriku –Tsunami* is one of the most destructive seismic disasters in Japanese history.

On June 15, 1896, the great Tsunami, a height about 20meters, that devastated *Sanriku* pacific coastal areas on the *Tohoku* region. And about 20000 people were killed or went missing.

This paper reports on the support activities by the religious organizations and religious people, especially focusing on the Buddhist monks , after the disaster.

In the disaster areas, their activities were memorial services for the victims, religious discourse for the survivors, and taking care of the orphans. Especially, a religious discourse and a memorial services are also means mental care for the sufferers.

Those activities were a spirit of charity, Buddhist virtues, and based on the elevating the Buddhist status, after the *Haibutsu-kishaku* (anti-Buddhist movement).

However, those were not only for improvement of Buddhists status. According to the notes written by some of Buddhist monk who acted on site, their activities were carried out by their affection and volition, suggested several episodes.

In addition, surviving temples in disaster areas were used for a temporary hospital, an emergency shelter, and a mortuary. The religious organization collected a great amount of contribution through their network.

To conclude, this paper points out the importance of the activities by religious people and religious organizations. Their activities are beneficial for the support at the time of disaster.